



阿刀田 高：著
新潮文庫 定価 540 円（税込）

旧約聖書を知っていますか

キリスト教やユダヤ教の正典である旧約聖書は、西洋文化のなかに深く根付いている。有名絵画の題材に数多く使われているし、映画や小説にもその一端がよく出てくる。アダムとイブ、ノアの箱舟、モーセの十戒、ソロモン王の栄華などなど、日本でも知られているこれらは、旧約聖書で語られているものだ。聖書を読まない日本の一般人は、言葉として知っていてもその内容を詳しく知らないのが普通だろう。しかし、西洋人は聖書に親しんでいるので、たとえば、「失われたアーク」という映画の題を聞いて、アークがモーセの十戒の書かれた石板を収めた聖杯だとわかるのである。やはり西洋文化をより楽しむためには、旧約聖書を読んでおきたい。しかし、多くの書き手に分かれ読み難いし、内容に矛盾を含んでいたりする部分も多い。現代日本語訳されたものでも相当に難解で、一般人が読み通すのは難しいものだ。

本書は、旧約聖書の“軽いダイジェストのような”エッセイである。エッセイとはいえ、ダイジェストの側面を意図する著者は、難解な話も大切な部分は丁寧に書いている。それを読み進めやすくするため、雑談を挿入したり、ミュージカル仕立てにしたり

と、各所に飽きさせないための工夫がちりばめられている。一例を挙げると、旧約聖書全体の構成を「するめ」にたとえている。冒頭の神話とおぼしき部分が、するめの頭。頭だけに重要な部分が多く、天地創造、アダムとイブ、ノアの箱舟、バベルの塔などが含まれる。本書では、すべてのエピソードについて言及し、原典以上にページを割いている。続く胴体は、系図を追ったイスラエルの歴史であり、旧約聖書の根幹をなす部分。本書の大半が、この部分の話となる。残り部分は、歴史あり、詩歌あり、預言書ありで、バラエティに富んでいる。これを枝分かれたするめの足と思えば、全体の構成がするめに似ているというのだ。わかるようなわからないようなたとえだが、本書は終始このペース。このペースにはまれば、あっという間に読み終えてしまうほど楽しい本である。

読みやすく、楽しい、それだけでお勧めできるほどの内容なのに、読み終えると西洋文化の基礎となる旧約聖書の知識が大いに増しているというおまけが付いてくるお得な1冊。ただし、まじめに旧約聖書に取り組もうという人には、軽すぎる内容だろうということも最後に付け加えておこう。